●せいてん質問箱

# 僧侶の袈裟にはどんな意味が？

●質問●
僧侶が身に着ける袈裟について教えてください。

□袈裟という言葉□

「坊主憎けりゃ袈裟まで憎い」と言われるように、「袈裟」は僧侶の代名詞のようになっています。この「袈裟」という言葉は、現在、僧侶の着用する衣服を意味するものとなっていますが、元は衣の色を意味していました。

□袈裟の色□

「袈裟」は、カーシャーヤという梵語に相当する音写語で、一般に壊色と意訳され、法衣の濁った色を意味しています。ある王様が、仏教の行者であると思い、象から降りて礼拝しようとしたら、バラモン教の行者であったという出来事がありました。これ以降、仏教の僧侶とわかるように、インドで好まれない色で衣を染めるようになったと伝えられています。主に、青・黒・木蘭の三つの色が使われていました。青は銅につく錆の色、黒は泥色、また木蘭はインドに自生するミロバランという樹木の実によって染色した色で、染める時の状況によって若干色の幅があるようですが、黄色と茶色の間くらいです。むしろ、日本の伝統では渋くて好まれる色と言えるかも知れません。

□袈裟の形□

袈裟の形は、場所・時代によって変化してきましたが、元々の袈裟の形をイメージするには、ご本尊をご覧いただくとよいでしょう。阿弥陀如来は、大きな布を体にまきつけるように身に着けていらっしゃいます。これが元々の袈裟の形です。マハトマ・ガンディーの衣服やインドの服サリーにも似ています。或いは、古代ギリシャやアフリカ等の一枚布をまとった形式にも似ています。この形は暑い地域に適したものなのです。

□三衣□

釈尊当時、法衣は三枚と決められていました。これは、無執着という仏教の理念を実践するための決まりで、執着の原因となる不必要なものを持たないという意味を持っています。三枚という数については、釈尊が屋根のないところで一枚の衣で休んでいると、夜になり寒気を覚え、もう一枚重ね着しても深夜に寒くなり、三枚目を更に羽織ると寒さをしのげたので、三枚まで許されたと伝えられています。

さて、三衣とはそれぞれ安陀会・鬱多羅僧・僧伽梨と呼ばれるもので、現在の五条・七条・九条に相当します。元々安陀会は腰に着けた肌着、鬱多羅僧は上半身を覆うもの、僧伽梨はそれらの上に羽織るものとして使われました。正式な場では僧伽梨まで着用するのが常で、仏像は、僧伽梨まで身に着けているものが多く見られます。

□糞掃衣□

袈裟は、糞掃衣とも呼ばれます。この言葉は、捨てられた布を使って作られた衣であることを意味しています。釈尊当時のインドで、体を覆える程の大きな布は価値があり、容易に手に入るものではありませんでした。そこで釈尊は、墓地で布を得るよう説かれました。というのも、遺体は布にくるんで火葬場に運ばれ、その布は墓地に捨てられていたのです。遺体に使われた布は、不浄なものと考えられ、捨てられたようです。この布を使いなさいという釈尊の教えには、とかく不浄と見られ忌避される死を、ありのままに見よという思いが込められていると受けとめられるでしょう。

□割截衣□

さて、五条袈裟や七条袈裟は通常、長方形の布が縫い合されています。この形状から、割截衣・福田衣とも呼ばれるのですが、この名は、小さい布が縫い合された形状が、綺麗に整えられた田地に似ていることに由来しています。たとえ大きな布が手に入っても、あえて布は裁断され縫い合されるのですが、なぜ、このような手間のかかる製法で作られるのでしょう。

ある時、釈尊は、山から綺麗に整えられた水田を見て「我が比丘らは、このように衣を作るべきだ」と仰いました。それを聞いた弟子の阿難は、すぐ教え通りに衣を作りました。釈尊は阿難の作った衣を見て「阿難は深い智慧を持っている。私が簡単に告げただけで、よいものを教え通り作った。これを〈割截衣〉と名付け外道と区別しよう。これなら盗賊から奪われることもない。破れても継ぎ当てをすればよい」と仰いました。

一旦小さく裁断することで、布の価値が低くなり盗難等に遭わない、補修しやすい、更に、異なる形状になりバラモン教の行者と見分けられるようになったわけです。また、他にも身なりや名誉に執着しなくなる、信者が端切れでも布施しやすくなるといった効果があったと伝えられています。

□袈裟の本質□

以上のように、袈裟の色、形、製法のいずれも、極めて実用的に決められていたことがわかります。材質についても、布施されたならば高価な布でも使用が許可されていましたが、長毛のものは許可されませんでした。長毛では、僧侶としての活動に支障を来すためと考えられ、これも同じく実用性の点から判断されていると言えます。

□袈裟の変化□

袈裟は衣類の一つですから、気候風土が変れば、自ずと変化していきます。中国に入ると、袈裟は現在私たちが見るような衣に近づき、装飾性が高まり、高価な布が使用され、裁縫も繊細なものになります。この流れは日本にも受け継がれ、日常の衣として使用されていた五条が、現在では法事等の場で使用されるようになっています。

□簡略化される袈裟□

一方で、簡略化の方向性も見られます。五条や七条を日常に使用することはできないので、簡略化された輪袈裟が近世以降、使用されるようになりました。禅宗や浄土宗などで首から掛けて使用する絡子も、同様の意味を持っています。

□袈裟を着る意味□

袈裟の持つ意味は様々ですが、釈尊の教えに立ち戻って考えるならば、僧侶であることを示し、僧侶であることを自覚するためのものであり、僧侶としての活動に適したものであったと言えるでしょう。衣の形は場所・時代によって変化していきますが、袈裟が本来持っていた意味は、いつまでも大切に継承していきたいものであります。

（教学伝道研究センター常任研究員
藤丸智雄）